でに大概知つて居つたもので獨り支那の文明のみが優秀なものであるといふ風に考へてゐなかつた事は明らかである。それが支那の文明を非常に貴いものであると考へて崇拜するに至らなかつた一つの理由であると思はれる。

併ながら別に考へて見なければならぬことは、支那文明に對してはかく考へたとして、然らばその以外に彼等は如何なる文明を尊重し攝取したか、必ずその何れかを學ぶことに勉めたであらうと考へられるであらうが事實は格別そういう傾向を認むる事が出來ず、何れに對しても支那文明に對するものと殆んど同樣の態度であつたと思はれる。それはまた如何なる理由によるのであらうか。この點についてもまた相當の理由があると思ふ。

蒙古人は早く既に多くの文明國に接觸したが、その何れの文明も蒙古人の武力の前には遂にその勢を保つこと能はざる無力のものであるといふことを知ると共に、彼等は如何なる文明人をも其下に使役してその文明を寄與せしめ得る事を知つたのである。そうしてかゝる情態を生ずる事になつたのは全く彼等の武力に基づくものである事をるめたものである。從がつて世の中にかゝる武力を有する蒙古人ほど優秀なものはないと自覺して居つたと思はれ認。實に當時の蒙古人の傲慢と民族的の誇とは甚しいもので、蒙古人といふ稱呼が如何なる他の尊稱よりも榮譽あるものであると考へて居つたのである。これは單なる想像ではなく種々證據のある事で、例へば前に述べた羅馬法王の使節カルピニの記事によると「蒙古人は世界の如何なる他の國民よりも傲慢ですべて他の國民を卑しみ、その高下に拘はらずこれを無視して居る」といひ、佛蘭西王の使節ルブルクも「彼等は彼等自身を世界の王であると心得て居り、何人といへども彼等に對して拒絶の權利を有せざるものと考へて居るやうである」といひ、更にまた「彼等は蒙古族といふ名が如何なる他の名よりも優つたものであると思ひ、假令いくらか基督を信じて居るとして